

60 野口英世著 「Serum Diagnosis of Syphilis」(一九一〇初版)の出版とその経緯について

会 田 恵

野口英世博士(以下「野口」)の生涯(一八七八—一九二六)と研究についてはよく知られているが、一九一一年初版「梅毒の血清診断」(以下「本書」)と出版に至るまでの研究については殆ど紹介されていない。

演者は野口が一九〇〇年渡米後フレキシナー博士(一八六三—一九六四)及び神経学者ミチエル博士(一八二九—一九一四)の指導により開始した梅毒の研究から種々の研究の経緯をへて血清免疫学的実験手法を体得し一九一〇年に本書を出版するに至る過程について述べる。当時より少し遡り十九世紀末より正常血液の殺菌作用(補体)、溶菌現象、凝集反応、抗毒素、血液型、補体結合反応など次々と発見されて血清学が誕生し免疫学の幕開け

となり、そして野口は一八九八年に北里柴三郎所長の伝染病研究所助手になる。渡米後まもなくペンシルバニア大学で梅毒の研究を精力的に行ない一九〇二年には最初の論文(蛇毒の血球溶解作用、抗細菌溶解作用及び毒性について)が発表されている。一九〇三年よりフレキシナー博士の推挙により創立間もないデンマークの血清治療研究所(Government Institute of Serum Therapy)に留学し約一年間、当時著名なマドセン博士に血清免疫学の指導を受け、Toxin et Antitoxinの他十編の発表がみられる。当時野口は二十六歳でマドセン博士(一八七〇—一九五七)はエールリッヒ、バースツールに学びジフテリア毒素、抗原抗体反応について研究を進めており、フレキシナー博士は米国より最初の留学生として野口を送ったのである。一九〇三年帰米し、研究によりロックフェラー研究所の所員として順次昇進するのであるが、本書が刊行されるまでには、溶血反応、凝集反応、沈降反応、補体などの研究と血清免疫現象についての研究が多数続き、生化学雑誌にも発表している。丁度その頃一九〇五年にはベルリンで女性の患者より「Treponema Pallidum」が

発見され翌年にはコッホ研究所のワッセルマン等による梅毒の補体結合反応の発見、さらに翌年にはエールリツヒによるサルバルサンによる治療が発見されている時であった。

このように野口は欧米医学の最新の研究の流れの中で、梅毒について強い興味を持ち補体結合反応を中心に約七年間の研究成果をまとめたものが本書となつてゐる。

本書の序文には、当時ワッセルマン反応（以下「ワ氏反応」）について多数の出版が出ていたので、臨床実験室で正確な成績を得られるように、また溶血の原則の簡単な説明を行なうことが本書の目的とあり、最後の章には自分の研究した神経梅毒の診断法は非常に有効であるとのべている。本書は一七三頁になるが本文は一三七頁で別に巻末には Bibliography として当時の梅毒についての実験室診断の研究者を二十一頁にわたり列記し、簡単な紹介も全員に添えているが、自分の名前も並べ一九〇六年より三年間の本書に関係する自分の十七編の英又は独佛文の論文も紹介している。さらに巻末の付録として

Clossky の八頁があり、当時の新しい血清免疫学用語にそれぞれの解説をつけてある。本文は十二章よりなり、溶血反応、抗原と抗体、梅毒診断に抗体測定の間接的方法の応用、梅毒の血清診断に補体結合反応の種々の方法、著者の推薦する梅毒の血清診断システム、著者の方法による修正、梅毒反応に関係する血清の不活化、ワ氏反応の技術と診断的価値、最後の十二章に上述の神経梅毒患者の脳脊髄液の酪酸によるグロブリン試験について二十一頁も述べている。

本書の二版が翌年一九一一年、三版が一九一二年と毎年改版増補し三版の最後には梅毒皮膚反応であるルエチン反応について三十四頁述べられている。大正五年（一九一六）にこの章が「ルエチン反応」として本邦で赤津誠内により（七十四頁）訳出出版されたが、歴史的な出版となつている。

（会田内科医院）